

佐賀市景観デザインコンペ

地元をデザインしよう！ 衰退する佐賀市中心街の 活気を取り戻せ！

県内の高校、大学が佐賀市景観デザインコンペに参加

中心市街地のにぎわいを取り戻すために、どんな景観が望ましいか。そんなユニークな景観デザインを考えるコンペティションが佐賀市内で行われた。市の中心市街地にある百貨店の広場と、アーケード街に開業する商店の広告デザインを提案するもの。百貨店の空間デザインでは地元・佐賀工業高校建築科の生徒チーム、広告デザインには佐賀大学都市工学科の学生グループが選ばれた。

コンペティションを主催したのは佐賀県CSO推進機構という佐賀市にあるNPO。同機構が佐賀市の公共活動に関する事業で提案した企画の1つとして実施したもので、コンペ実施に当たっては県内の高校や大学、関連団体などを集めて勉強会や現場見学会も開催している。また5年目を迎えた同市の屋外広告物条例や今年度から新たに施行した景観条例を周知するための狙いも含まれていた。

募集は空間デザインと広告デザインの2部門で行い、空間デザインで対象となった施設は佐賀市中心街にある佐賀玉屋の南館2階のテラス部分。「(同店の)地下や1階で販売されている食料品を購入して気軽に立ち寄ることの出来るような魅力的な憩いの空間」の提案。一方、広告デザインは2店舗が対象となり、1店は中心街の1階部分に店舗が密集したビル内に新しく営業する「フランスがいっぱい」をコンセプトにしたカフェ。もう1店はJR佐賀駅近くのアーケード街の入口部分にある「健康志向の女性」のための中国茶専門店。どちらも店舗壁面を使って広告をデザインするもの。

舞台となった佐賀市中心街は他都市と同様に衰退傾向にあり、街の再生に向けて2005年に中心市街地活性化計画を策定。定住人口や来訪者の増加を目指した「住む人来る人を街に歩かせる」を基本方針に掲げ、ハードとソフト事業を展開中。しかし人口(佐賀市全体)は計画スタート時の24.1万人から23.7万人に減少。商業の年間販売額も8,500億円(2004年)から7,835億円(2007年)に減っていた。そうした中においてNPO団体「ユマニテさが」が企画したコンテナを活用した商業空間「わいわいコンテナ」や商店組合の所有していた広場を市が買い取って再整備した街なか交流広場「656広場」がオープン。地元商工会議所の調査によると、4年前に6万7,873人(4日間)だった中心街の歩行者量が昨年は7万

3,314人に増えた。以前と比べて街中ににぎわいが戻ってきた感があるという。

景観デザインコンペはそうした中心街の状況下「佐賀にこんな場所があったらいいな」「考えてもみなかったけど、これも佐賀らしい景観かな」(コンペ要綱)というような提案を募る企画。募集条件は35歳以下の一般、大学・高校生となっていたが、大学生と高校生だけの応募となった。審査

は佐賀大大学院工学系研究科の三嶋伸雄准教授と同大出身で佐賀市在住の洋画家・塩月悠氏が担当し、同大地域連携デザイン工房の田口陽子講師が司会役となり進行。まず空間デザイン部門は佐賀大都市工学科4年生の穴井祥一郎氏ら5人のグループがプレゼンテーション。「私たちは2つの視点から提案する。1つはアーキテクチャーレベルの視点。2つ目はシティレベルの視点」とし、アーキテクチャーの視点では百貨店2階の床をデッキ仕上げ、シティレベルでは歩道に植栽する提案を行った。次に佐賀工業高校建築科2年生の杉本敦奈氏ら5人の生徒チームが「運命の赤い糸」というタイトルで発表。ハート形の「恋愛成就のストーン」を1階床に埋め込み、2階の壁は透明なアクリル板で覆って街を見渡せるというプランを提案。

一方、広告デザイン部門は佐賀大の同グループ1組と有田工業高校デザイン科3年生、そして佐賀北高校2年生の6人がプレゼン。フランスをコンセプトにしたカフェの広告では、トリコロールカラーによる看板デザインなどを提案。中国茶店の広告では茶器をイメージしたロゴデザインなどが示された。

審査結果は空間デザイン部門で「ハート型の石に着目し、恋人同士だけでなく大人も集まってくるようになるのではないかと発想の豊かさを評価して佐賀工業高校の生徒チーム案を金賞(1等)に選定。広告デザインでは佐賀大のグループ案をノミネートした。審査に先立ち、市内の商業施設で巡回展示も実施。その際に行った市民投票では佐賀大グループが空間デザイン部門で1位、広告部門は有田工業の生徒案が1位となり、それぞれ「市民賞」が授与されている。

審査を終えて三嶋氏は「応募作品は少なかったが、少数精鋭でアイデアを絞ったものばかりだった」と講評。同席した樋渡修三氏(佐賀市建築指導課課長)も「景観にマッチしたデザインの提案となり、ありがたく

思っている。今後も景観向上に努力してもらいたい」とエールを送っていた。

今回のコンペはアイデアを競うもので実施を前提としたものではなかったが、「対象となった店舗では『積極的に受け止める』と答えるところもあった」と主宰者側では話していた。(ルポライター・古田孝)

佐賀市中心街の再開発ビル内で行われた公開審査の様相

